

鹿児島県日置市美山所在の嘉永元年銘石碑

渡 辺 芳 郎

はじめに

近世において「苗代川」と呼ばれた鹿児島県日置市（旧東市来町）美山は、豊臣秀吉の朝鮮出兵（1592-98年）の際に連れてこられた朝鮮陶工によって始められた薩摩焼の窯場で、現在も鹿児島県を代表する窯業地として知られる。

筆者ら鹿児島大学法文学部人文学科異文化交流論研究室では、2006年2月27日～3月1日、3日～5日の6日間、苗代川窯跡群分布調査を実施した。その詳細については、すでに別に報告しているので（渡辺2006b）、ここでは、調査中に実見する機会を得た嘉永元年（1848）銘の石碑について報告したい。ただし後述するように、石碑銘文について不明な点も残る。ご教示たまわれば幸いです。

1 石碑について

本稿で報告する石碑については、鮫島佐太郎『苗代川のくらし』（鮫島1987）に触れられている。同書によれば、石碑は「山舞楽ヶ岡」と呼ばれる「雪ノ山」に所在し、「毎年春秋に苗代川人たちが、往昔より山頂の広場に集まりつどって、故国の祖霊を祀った。はるかに西方のかなた、海と空を眺めて望郷の宴を催し、歌舞終日に及んだ場所である。山頂に左の通りの碑石が建っている」（pp.76-77）とあり、石碑の銘文が掲げられている。

また『東市来町郷土誌』（四元編1988）の「薩摩焼（苗代川）年表」（pp.505-511）の嘉永元年の項に「山舞楽の岡に望郷の碑建立」とあり、「山舞楽ヶ岡」については、野間吉夫『苗代川』（野間1974 pp.35-37）でも触れられている¹⁾。

2006年3月5日、十五代沈壽官氏の案内で、筆者と学生4名（有馬由美子・

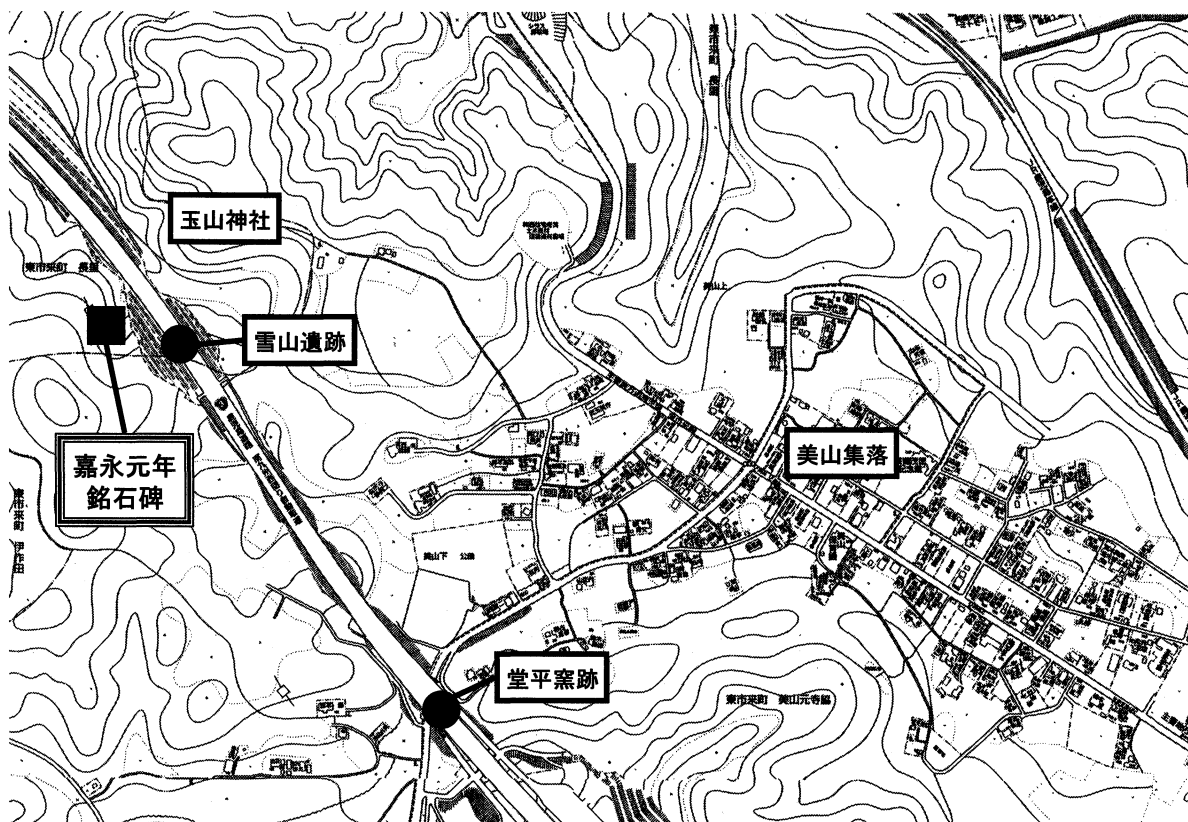


図1 嘉永元年銘石碑位置図

河野裕次・榊原えり子・真邊彩，当時鹿児島大学法文学部3年生）は，本石碑を踏査し，その銘文を確認するとともに，携帯GPS（GARMIN社 Geko 201）で北緯・東経を記録した。

石碑は美山集落の西北，雪山遺跡（宮田・関・三垣編2003）に近い山中に所在し，北緯 $31^{\circ} 38' 41.5''$ ，東経 $130^{\circ} 21' 03.2''$ である（図1）。現在では周囲は山林になっており，海を望むことはできない。

石碑は刀子形を呈し，高さ143cm，下端幅46cm，厚さ17cmをはかる。前面に計70字が刻されている。先述した鮫島1987掲載の銘文と筆者らが確認したものは，若干の異同が認められたので，ここに改めてその全文を掲げたい（図2）。

2 石碑銘文について

まず本文であるが，前半の「金龍山浅州寺」「六月堂」は，江戸の「金龍山浅草寺」とその「六角堂」の誤記と思われる²⁾。後半の「今斜陽遥望唐土峻嶺

嘉永元年 戊申 六月十八日 金龍山 浅州寺 為觀世音

六月堂參詣及今斜陽遥望唐土峻嶺為是建牌

相伴人 重久氏 田尻氏 李圓達 金金益

朴龍益 朴權伯

願主

村田甫阿弥經甫



図2 嘉永元年銘石碑と銘文（写真：渡辺撮影）

為是建牌」は、伝来通り、故郷の朝鮮（唐土）を偲ぶ苗代川住民のためにこの碑が建てられたことを示している。

つぎに「願主 村田甫阿弥經甫」とは、薩摩藩の財政再建に奔走した藩家老・調所笑左衛門広郷（1776-1848年）により、苗代川振興のために派遣された村田甫阿弥（吉田1965参照）のことであろう⁽³⁾。また「相伴人」に出てくる「重久氏」については不明であるが、「田尻氏」とは田尻善斎のことと思われる。彼が、村田甫阿弥とともに苗代川振興のために派遣されたことは、弘化2年（1845）の『御内用萬留一番』（吉田・横井1965a p.78）や同年の『所役日記』（谷川編1972 p.733）などから知られる。また『薩摩焼の研究』において報告されている弘化3年（1846）銘の竈神石塔には、裏面に「寄屋頭 村田甫阿弥」「検者 田尻善斎」とあるという⁽⁴⁾（田沢・小山1941 p.184）。両人は19世紀中頃の苗代川振興の中心メンバーであったと考えられる。

一方、苗代川の住民と思われる朝鮮姓の4名のうち、金金益については、明

治18年の『繭糸織物陶漆器共進会 陶器功労者履歴』（『薩陶製菟録』（鹿児島県立図書館蔵）所収，以下『履歴』と略記）⁵⁾のうち「金泰京」の項に次のように記されている⁶⁾。

金金益

- 一 天保十四年焼物師見習被仰付候
- 一 嘉永六年焼物師被仰付候

また「朴龍益」については，ほぼ同時代で類似した名前が，やはり『履歴』の「朴龍易」の項に以下のようにある。

八代 朴龍石

- 一 文政十二年焼物師見習被仰付候
- 一 天保八年焼物師被仰付候
- 一 弘化三年小細工主取被仰付候
- 一 安政元年惣主取被仰付候

九代 朴龍易

- 一 安政四年焼物師見習被仰付候
- 一 文久二年焼物師被仰付候
- 一 明治七年焼物所工長被仰付候
- 一 明治十五年第二回内国博覧会に沈壽官出品の龍船に七福神の置物は何三官と兩人にて製造仕候。以来壽官方に捻細工のみ製造仕居候

「朴龍益」が「朴龍易」なのか，「朴龍石」なのか，あるいはまったく別の人物なのかは，現段階では判断できない。また「李圓達」「朴權伯」についても，今のところ不明である。

以上より，不分明な点が多々あるものの，本石碑が，伝えられているように，苗代川住民の望郷の祭礼のために，嘉永元年に建立されたことが再確認できる

とともに、その建立にあたっては、苗代川住民とともに、村田甫阿弥など、苗代川振興の中心的人物が深く関与していることがわかる。後者の点について、次章で改めて検討したい。

3 石碑と藩の苗代川保護振興策

先述したように、19世紀中頃、藩財政の再建策の一環として、苗代川の保護振興がはかられる⁽⁷⁾。その具体策としては、まず色絵技術の導入が挙げられる。『履歴』の「朴利行・朴義通」の項によれば、朴正官は、苗代川でも豎野窯と同様の色絵生産を望み、藩に申し出たところ、豎野窯の樋渡伝兵衛・内田源助が派遣され、色絵技術を習得したという。朴正官は弘化元年（1844）に「錦手主取」（主取＝責任者）に任命されている。また弘化2年の『所役日記』にも、豎野窯の陶工が苗代川を訪れる記述が出てくるので（谷川編1970 p.745）、引き続き、豎野窯との交流が続けられていたのであろう。この色絵技術が、幕末～明治期、海外に大量に輸出される金襴手薩摩の技術的ベースになったと考えられる。

もうひとつの振興策は磁器生産である。近世後期の薩摩藩では、薩摩川内市の平佐焼窯場を中心に複数の磁器窯が確認できるが、苗代川では、弘化3年（1846）に南京皿山窯が開窯し、本格的な磁器生産が始まる（田沢・小山1941 pp.215-218）。その際、先祖の代より平佐に居住し、磁器生産に関わっていた白欣碩・白欣圓が呼び戻され、嘉永元年（1848）「肥前伝焼物主取」（肥前伝焼物＝磁器）に命じられる（吉田・横井1965c、渡辺2003）⁽⁸⁾。

また磁器生産にあたっては、藩直営の山林「御手山」から柞灰（磁器釉薬の原料）が供給されていたことが、御手山支配を命じられた山元荘兵衛の文書（山元家文書）からわかるとともに、「苗代川御用」という語も見られることから（上原1993 p.275、前山2001 p.50）、藩内における苗代川の磁器生産の位置づけもうかがい知れる（渡辺2006a p.115）。

さらにこの時期、素焼人形の製作も行われている。『御内用萬留一番』によれば、京都深草産の人形が大量に藩内に流入する⁽⁹⁾ のに対抗して、弘化2～3年頃、

苗代川で素焼人形生産が始められたことが記されている（吉田・横井1965b）⁹⁰。

このような苗代川保護振興策は、調所広郷の死後、島津斉彬（1809-58年）の時代にも引き継がれた。『斉彬公史料』嘉永5年（1852）3月16日の項によれば、斉彬は「騎シテ、伊集院苗代川ノ陶磁器製造ヲ覧玉ヒ、錦手焼ノ改良、及ヒ今里（伊万里）焼ヲ創ムヘキノ旨ヲ令シ玉フ」とある（鹿児島県維新史料編さん所編1981 p.497）。先述したように、苗代川における磁器（＝今里焼）生産の開始は弘化3年にさかのぼるので、この記述には若干の疑問が残るが、少なくとも斉彬が苗代川に関心を持っていたことはうかがえる。

また斉彬が、集成館事業の一環として、薩摩焼の海外輸出を企図し、釉薬などの改良を行ったことは、『斉彬公御言行録』（市来編1885（1944） pp.68-70）に記され⁹¹、安政4年（1857）には朴正官を磯窯（現在の鹿児島市吉野町）に呼び寄せ、色絵の開発などに従事させたと伝えられている（上記『履歴』より）。

以上のように、本石碑が建立された頃、藩による苗代川の保護振興策が、積極的に進められていた。伝えられているような祭礼が、いつの時代に始まったのかははっきりとしないが、そのための石碑建立という事業は、願主が保護振興策の中心人物であった村田甫阿弥であることから、その政策の一環としてなされた可能性が想定できる。

おわりに

以上、美山に残る嘉永元年銘石碑について報告するとともに、その銘文ならびに石碑建立の意味について、若干の検討を試みた。その結果、本石碑は、当時の苗代川の祭礼とともに、幕末の藩による苗代川保護政策の一端を伝えている可能性があることを示した。ご叱正をたまわれれば幸いである。

2006年10月13日 了

謝辞

本石碑にご案内いただいた十五代沈壽官氏に心より御礼申し上げます。また原口泉氏（鹿児島大学法文学部）からご教示を受けました。感謝申し上げます。

注

- (1) 「山舞楽ヶ岡」と呼ばれる場所は、もうひとつ「丸尾ノ山」があるという（鮫島1988 p.76, 野間1974 p.37）。また『三国名勝図会』（天保14年（1843））の「玉山廟」の項に、「当所雲の山・丸尾山等に於て、春秋祭祀をなす」とある（原口監修1982 p.508）。「雲の山」とは「雪の山」の誤記であろうか。
- (2) 「草」は「艸」とも書き、「州」と誤記されやすいという。原口泉氏ご教示。
- (3) 調所広郷と村田甫阿弥の苗代川振興に感謝して建てられた、両人の招魂墓が美山に残っている。
- (4) ただしこの石塔は、現在のところ未確認である。同書で報告されている石塔の銘文（弘化三丙午四月日／奉祭竈神／為御救）は、現在、南京皿山窯跡の前方に残る石塔のそれと同じであるが、その裏面には村田・田尻の刻銘は見られない。
- (5) 『薩陶製蒐録』によれば、まず苗代川と龍門司からそれぞれ鹿児島県令・渡辺千秋宛に陶工履歴書が提出され（苗代川の提出者は鹿児島郡外四郡長・池田休兵衛）、両者を整理・統合したものが農商務卿・松方正義宛に提出されたようである。本稿における引用部分は、いずれも苗代川から県令宛に提出されたものの一部である。
- (6) なお同文献には、「金金益」の名前がもうひとり出てくるが、寛政～文化年間（1789-1818）頃の人物で、年代的に合わない。
- (7) この時期の苗代川保護振興策については、深港恭子（2002）が苗代川文書に基づいて検討している。本稿でも参照させていただいた。
- (8) 苗代川では、南京皿山窯のほかに御定式窯でも磁器が焼かれていたようである（田沢・小山1941 pp.185-189）。
- (9) 薩摩藩における京都深草人形の流通については詳細不明であり、今後の課題である。しかし京都産土師質製品が流通していたことは、考古学資料からわかっている（渡辺2005）。
- (10) このほか平佐でも焼かれたという（吉田・横井1965b）。これらの実態についてはほとんどわかっていないが、今回の分布調査中、十郎窯の染浦十郎氏宅で、氏が畑から掘り出したという大黒像の土型を見せていただいた。前面と後面の2個一組の土型で、それぞれの背面に「御用」の刻銘が見られる。年代推定は難しいが、「御用」とあるので近世のものと同推測され、本文中で述べた素焼人形生産に関わる資料の可能性もある。また年代不詳ではあるが、苗代川に伝わっていた大黒像の「抜き型」の報告例がある（池之上2002）。

- (1) 磯窯跡推定地より、洋食器に近い形態の焼成不良の磁器皿が採集されており、斉彬の意図を考古学的に支持する資料と考えている（渡辺2006a p.112）。

参考引用文献

- 池之上真吾2002「苗代川の「抜き型」」『からから』13号 pp.23-24
- 市来四郎編1885（1944）『島津斉彬言行録』岩波文庫
- 上原兼善1993「嘉永・安政期薩摩藩の林産物仕法」『日本水上交通史論集』第5巻 pp.263-288 文献出版
- 鹿児島県維新史料編さん所編1981『鹿児島県史料 斉彬公史料』第1巻 鹿児島県
- 鮫島佐太郎1987『苗代川のくらし』南日本新聞開発センター
- 田沢金吾・小山富士夫1941『薩摩焼の研究』東洋陶磁研究会（1987年国書刊行会復刻）
- 谷川健一編1970『日本庶民生活史料集成』第10巻 三一書房
- 野間吉夫1974『苗代川』東峰書房
- 原口虎雄監修1982『三国名勝図会』第1巻 新潮社
- 深港恭子2002「弘化から嘉永年間の苗代川における焼物生産について」『黎明館調査研究報告』第15集 pp.27-41
- 前山博2001『幕末期の肥前有田は薩摩産の柞灰を求めた／柞灰の山里を尋ねて』私家版
- 宮田洋一・関明恵・三垣恵一編2003『雪山遺跡・猿引遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 吉田光邦1965「秘められた焼もの職人史1」『日本美術工芸』323 pp.108-112
- 吉田光邦・横井清1965a「秘められた焼もの職人史2」『日本美術工芸』324 pp.76-79
- 吉田光邦・横井清1965b「秘められた焼もの職人史4」『日本美術工芸』326 pp.116-119
- 吉田光邦・横井清1965c「秘められた焼もの職人史6」『日本美術工芸』328 pp.122-125
- 四元幸夫編著1988『東市来町郷土誌』東市来町教育委員会
- 渡辺芳郎2003「近世鹿児島における磁器窯場間の技術交流」『鹿児島大学法文学部 人文科学論集』第57号 pp.89-106
- 渡辺芳郎2005「鹿児島出土の京都産土師質製品」『からから』19号 pp.19-21
- 渡辺芳郎2006a「磯窯考－集成館事業における在来窯業の役割－」『近代日本黎明期における薩摩藩集成館事業の諸技術とその位置づけに関する総合的研究』平成16・17年度科学研究費補助金（特定領域研究（2））研究成果報告書（代表：長谷川雅康）pp.103-116 薩摩のものづくり研究会
- 渡辺芳郎2006b「日置市美山・苗代川窯跡群分布調査報告」『からから』22号 pp.4-12